
パチュリーとウサギ

深鏡棕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パチュリーとウサギ

【Nコード】

N1399G

【作者名】

深鏡棕

【あらすじ】

パチュリーがウサギを世話することになるお話。

私と彼女が会ったのは泥棒魔法使いが私の部屋に連れてきたのがきつかけだった。

「よー！パチュリー！また来てやったぜ！」

退屈だった毎日に、この少女は新鮮な空気を運んでくれる。

表にはださないが、この少女の来訪を待ち望む私がいるのだ。

「……どうしたの？魔理沙？」

少女の名前『霧雨魔理沙』という。

癖っ毛の金髪は光を湛え、私には眩しく見える。

それは私にはない輝きのように見えて、病弱な私には羨ましい。だからだろうか、彼女が来ると私の部屋が明るくなる。

私の気持ちも明るくなる。

「今日はパチュリーにお土産を持ってきてやったぜ」

そんな魔理沙の胸に抱かれているのは白い塊。

「それは？」

「てゐにもらったんだよ」

「あのウサギの？」

「そーそー」

魔理沙の胸から、その白い塊が飛び出した。

ヴァージンスノウのような白さ、紅い瞳、長い耳。

実際初めて見るが、間違いなくウサギ。

「こいつさ、両親が死んじゃったらしくてさ」

魔理沙はウサギを一撫でする。

「死？」

長く生きていると、『死』という存在がよくわからなくなる。文字の上ではわかる。

わかるのだが、実際に目にしないとわからないものがある。

「でさ、このウサギやるよ」

「……え？……困る……」

魔理沙はウサギを拾い上げ、私の膝の上に優しく置いた。

「……あつたかい」

「それが命の温もりってヤツだぜ」

円らな紅い瞳は引き込まれそうな魅力がある。

「……かわいい」

「だろ？名前を付けてやれよ」

「……名前？」

じーっと私を見上げる瞳。

「……マリサ」

「ん？呼んだか？」

「違う、この子の名前。マリサ」

「ネーミングセンスねえなあ。まあ、いいけど」

魔理沙がマリサの頭を撫でる。

「よろしくな、マリサ」

「……マリサもよろしくって言うてる」

「ふふっ、パチュリー、マリサ可愛がってやれよ」

「うん」

なし崩し的に飼うことになったマリサ。

魔理沙によく似てマリサはちゃんちゃだ。

本の山に突っ込み、本を散乱させたり。

私が飲んでる紅茶に頭を突っ込み、軽いやけどをさせたり。

マリサはよく動き回る。

動き回るのに、私の視界内からいなくなることはない。

魔理沙もマリサを押し付けたことが気になったのか、いつもより

来訪のペースが早くなった。

「どうだ、マリサは？」

「かわいい。魔理沙もマリサを見習うべき」

「ほっとけよ」

何もかもが楽しかった。
でも、そんな日は長く続かなかった。

「魔理沙っ!!」

私は彼女の来訪を待ち望んだ。

私の声が届いたのか、魔理沙はいつもと違う表情を浮かべて現われた。

「どうした!？」

「マリサが!!」

私の膝の上でマリサが丸くなっている。

小刻みに震え、いつも元気に跳ねる様は夢のよう。

「……薬は？」

「この薬をあげた」

私が渡した薬の調合の紙を見て、魔理沙は優しく微笑んだ。

「いい調合だ。マリサのこと、大好きなんだな」

「好き、好きだから!魔理沙、助けて!」

魔理沙の笑顔に影が差した。

「もう、私にはなにもできないよ。私たちはマリサの生命力を信じるだけさ」

魔理沙は私の頭を優しく撫でた。

「魔理沙が私をマリサ扱いにする」

「そうだな」

私は、どうすればいいんだろう?

この溢れる涙をどうすればいいんだろう?

「マリサを信じろ」

魔理沙は私の頭を胸に抱いた。

柔らかくて暖かいその感覚は、安らぎを与えてくれる。

「パチュリーの薬の調合に間違いはない。だから、マリサを信じろ」

「……魔理沙」

「ん？」

「…私忘れてた。死ってこんなに悲しいことだったこと」

「…そうだな」

「…残される悲しみがこんなに辛いなんて」

「…そうだな、でも……」

私はゆっくりと魔理沙を見上げた。

「私も死ぬんだぜ？お前を置いて死ぬんだぜ？」

そうだ、魔理沙は普通の人間。

マリサも魔理沙も私を置いて死んでしまう。

「死なないで、死なないで」

「パチユリー、それはムリな話だ。私は人間である以上死ぬ。マリサも死ぬ」

「魔理沙！？」

「私がさ、死ぬときは笑顔で見守ってほしい」

「そんなこと言わないで」

「パチユリー、これが現実だ」

私は再び魔理沙の胸に顔を埋めた。

彼女の服が私の涙で湿っていく。

「私の存在はパチユリーにとって悲しい存在か？」

「……ううん。楽しい」

「だったらさ、私が死ぬときには笑顔で頼む。そして、マリサの存在が悲しくないのなら、笑顔で見送ってやってやれよ」

「……ん」

「…んあ」

まどろむ。

私、うたた寝しちゃったのか。

「あ！マリサ！！」

「それはどっちの魔理沙だよ？」

いつも閉じられているカーテンが開かれ、日の光が部屋に差しして

くる。

その光に照らされ、白い塊がぴよこぴよこと跳ねる。

「……マリサ？」

「うん、マリサがんばったろ？褒めてやれよ、パチュリー」

「マリサ！」

私の胸の中で小さな白い命は、確かにそこにあつて。

その存在を認識できて。

いつまで一緒にいれるかわからないけど。

いつまでも私は笑顔でマリサを見守りたい。

もう、悲しい顔は見せないよ。

「…パチュリー、いい笑顔だぜ」

当然よ。魔理沙も笑顔で見守るつもりなんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1399g/>

パチュリーとウサギ

2010年11月12日11時16分発行